

IV 第13回 鯨に関する座談会

主催 水産海洋研究会
鯨類研究所

日時 昭和45年11月27日 13:00~17:00
会場 日本水産株式会社会議室
コンピナー 河村章人 (鯨類研究所)

話題および話題提供者

- | | |
|--------------------------------|-----------------|
| 1. 北太平洋、ベーリング海における抹香漁 | 古川文康 (大洋漁業株式会社) |
| 2. 近年の北太平洋及びベーリング海域のナガスクジラについて | 加藤英明 (日本水産株式会社) |
| 3. 19次北鯨、イワン鯨操業概況 | 川島和幸 (極洋捕鯨株式会社) |
| 4. イワンクジラの群れの調査結果 | 町田三郎 (鯨類研究所) |
| 5. 北鯨のヒゲクジラの餌料 | 河村章人 (鯨類研究所) |

1. 北太平洋、ベーリング海における抹香漁

古川文康 (大洋漁業株式会社)

帆船捕鯨の時代の記録によれば中部太平洋及日本沿岸では可成りの捕獲をあげているが、 40°N 以北では僅かにアラスカ湾と千島附近に捕獲を見る程度でありベーリング海の中での抹香の捕獲はない。

抹香は南にくらべ北は余り高緯度まで上らないと言うが戦前の昭和12年農林省快鳳丸の北氷洋調査の際ベーリング海峡チャブリナ岬 ($62^{\circ}30'\text{N}$) で1頭発見しており、これが今迄記録に残っている北の限界である。同年日水の雄基丸が調査におもむきアナディール湾にて3頭発見している。下って昭和15年戦前の第1回北洋捕鯨が始まったが、この時はヒゲとの混獲でカムチャッカ、コマンドルスキー、オリュートル、ナバリンを経て北氷洋に出た。抹香はカムチャッカ、コマンドル、オリュートルに多かった。昭和16年の第2回はオリュートルまでしか北上しなかったがオリュートル湾内で抹香の大群を発見したとのことで、あとの漁場は大体第1回と同じであった。此の2回に亘る操業では抹香捕獲の最北端は $60^{\circ}50'$ でそれ以北は全然発見がなかったと報告されている。尚戦後の北洋捕鯨での抹香発見最北端はどうかと言うと、昭和31年第5次に始めてナバリン岬からアナディール湾内を調査翌32年はアナディール湾内で初操業した。翌33年7次には戦後初めて、ベーリ

ング海峡を通過して調査船が北氷洋に入ったが、いずれの場合にも抹香の発見はナバリン岬の南側の
みで62°N以北の発見の記録はない。

北洋母船式捕鯨抹香捕獲数

次	昭和 西曆	日 本			ソ 連			計
		船団	捕 獲	平均体長	船団	捕 獲	平均体長	
1	15 ' 40	1	177		—			
2	16 41	1	156		1	194		
	21 46		—		1	316		
	22 47		—			—		
	23 48		—		1	574		
	24 49		—		1	774	43.9	
	25 50		—		1	587	43.1	
	26 51		—		1	765	43.4	
1	27 52	1	—		1	731	43.8	
2	28 53	1	—		1	865	44.2	
3	29 54	(1) 2	490	47.5	1	816	44.4	1306
4	30 55	2	1084	45.6	1	996	45.6	2080
5	31 56	2	1598	45.6	1	998	43.7	2596
6	32 57	2	1700	44.8	1	1174	44.5	2874
7	33 58	2	1500	46.1	1	1430	44.8	2930
8	34 59	2	1800	45.7	1	1560	45.6	3360
9	35 60	2	1800	46.1	1	2228	44.6	4028
10	36 61	2	1800	45.3	1	1868	43.9	3668
11	37 62	3	2549	46.3	2	1955	41.9	4504
12	38 63	3	2700	44.7	4	5125	41.9	7825
13	39 64	3	2460	45.6	4	5432	41.5	7892
14	40 65	(2) 3	2460	46.1	4	8196	42.5	10656
15	41 66	(2) 3	3000	43.8	4	9476	41.9	12476
16	42 67	(2) 3	3000	43.5	4	9430	42.6	12430
17	43 68	(2) 3	3000	42.9	3	9542	41.8	12542
18	44 69	3	3000	42.0	3	8198		11198
19	45 70	3	2700	45.3				

() は抹香捕獲船団

昭和27年戦後第1回の北洋捕鯨が再開されたが、抹香の捕獲は昭和29年第3次錦城丸の試験操業の時である。この時は17°W~18°の島周辺のみだったが、昭和30年第4次には極洋船団が前年の錦城の漁場を操業後帰途東経島沿い北側を始めて操業し好結果を得た。これに反し此の年初の抹香船団として出漁した錦城丸は出帆が8月と遅かったことと、悪天候、故障船の続出で効果上らなかった。ウニマクよりセントジョージ間及西経島沿い北側で主として捕獲をあげた。

翌31年第5次に至ると抹香操業のパターンが出来以後約10年同じ様に繰返された。即ち先航の極洋船団がアツ島より列島北側を東進、ウニマクより反転アムチトカ水道迄の間26日間で608頭捕獲した。遅れて出帆した松島丸船団もアツ~ウニマク間を主として北側のみを4度往復して990頭を捕獲してようやく抹香漁場のポイントをつかんだ形である。

昭和32年には第6次、西はステールメートバンクから東ウニマク水道の間を往復57日で1500頭を捕獲した。

昭和33年第7次も前年と同じくステールメートバンクからウニマクの間を反覆49日間で1300頭を捕獲、1日当り26.5頭平均体長45.8フィート 鯨油1頭当り8.5トンと言う好成绩であった。この年は東経列島北側に大型鯨が多かった。

昭和34年第8次も大体同じ漁場であったが列島北側でソ連船団と度々混戦し、加うるに濃霧に悩まされたため列島沿いを離れアムリア島~アダック島の太平洋側沖50~80渾沖へ出て30頭程の捕獲があった。この年は1600頭を71日間もかかっている。

昭和35年第9次は列島沿いの鯨も漸次薄くなった模様で、初めてベーリング海中央の58°N、175°W附近に新漁場を開拓、ウニマクより等深線沿いに、又そこよりボワーズバンクに至る三角形を4回操業可成りの効果をあげた。列島沿いは天候の関係もあつたが主として北沿いのみで東経の南側を一度通つたのみで西経の南側は操業しなかつた。1600頭を68日間にて達成した。

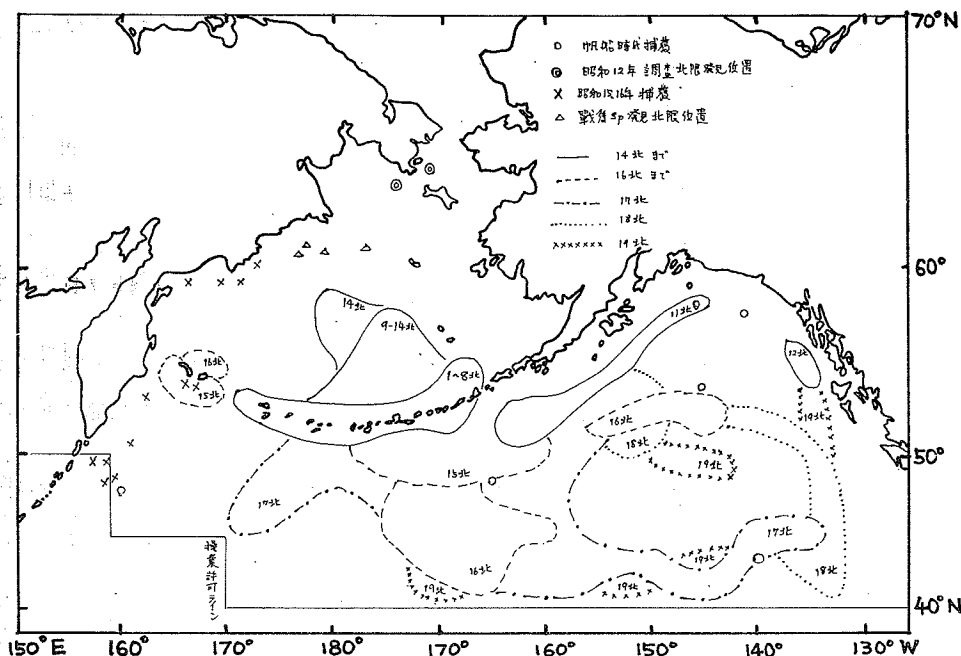
昭和36年第10次はヒゲ抹香別船団出漁最後の年であるが、列島沿いも少なくなり、ソ連と混戦することも多く(この年までソ連は1船団、列島沿いはコマンドルスキーからアムクタ水道まで操業の模様)今迄に比べれば可成りきびしい操業であった。此の年は列島北側のみ4~5回往復前年開拓の三角地帯へも3回遠征したが前年ほどではなかつた。

昭和37年第11次は日東丸錦城丸極洋丸の三船団がそれぞれヒゲ抹香混獲で出漁した。各船団共前期抹香、中期ヒゲ、後期抹香と言う操業形態をとつた。極洋船団は列島沿い及ベーリング海中央漁場で捕獲したが、錦城はヒゲをアラスカ湾西部にて捕獲した関係で、コジャック、アラスカ半島沿いで抹香30頭を捕獲、日東もコジャック南からアラスカ半島沿いで抹香約130頭を捕獲し、アラスカ湾における抹香漁場を開拓した。両船団とも残りは列島沿いで捕獲した。

昭和38年第12次はソ連が4船団に増強(アリユート・ロシヤに加うるに新造のダルニーポストーク・ウラジオストック)至る処で競合した。列島近くのヒゲ漁場が荒廃して来たので各船団とも前期抹香を列島沿いで行い、相次いでアラスカ湾に入りここでヒゲを完了後期抹香を再び列島沿いで操業と言う形態をとつた。アラスカ湾の奥深くで抹香を捕つたが、発見頭数が多いが小物多く選鯨に苦勞

し、それならばと列島に突走った様である。列島附近も殆んど北側のみを東西に亘って操業した。

昭和39年13次は前年と同じ操業方法がとられたが抹香のアラスカ湾内での比重が増した。



第1図 北太平洋及びベーリング海におけるマッコウジラ漁場の変遷

昭和40年第14次は3年に亘る3社3船団が別れ大洋、極洋の共営となり極洋のヒゲ専門、大洋の抹香専門となる。

3日新船団は大型抹香を狙って列島北側からベーリング海を広く操業特に59~60°N、180°附近で約120頭の捕獲があった。

昭和41年第15次は再びベーリング海内部の大型を狙ったが、殆んど発見なく列島沿いも極端に薄く、そのためアリューシャントレンチの南側及びコマンドルスキー附近を開拓したがコマンドルスキー附近は小物が多かった。アリューシャントレンチの南側は一つもの大物だが下長く一時間位入っていて能率は悪い。この年はソ連4船団の北太平洋における抹香の捕獲は遂に9000頭を越え日ソ合計12476と大巾に上昇した(沿岸を加えず)。ソ連の捕獲は13次5125、14次5432と上昇して来たがこの9000頭台の捕獲は17次まで3年間続く。

昭和42年16次に至り益々列島沿いは淋しくなり、3日新の列島沿いの捕獲は32%に過ぎず、ベーリング海に至っては捕獲皆無となりこれを補うに西経域45°Nを中心にした沖合及アラスカ湾が大きな役割を果たした。アラスカ湾及コマンドルスキーは小型が多く歩留りが悪いが漁場転換時には操業せざるを得ない状況であった。図南丸船団も抹香は主として南の漁場で捕獲した。

昭和43年17次は大洋の抹香専漁最後の年で、列島附近はますます淋しく1往復14%程度の捕獲となり、これを補うにアラスカ湾及北太平洋の沖合一帯に亘った図南も同じくヒゲ操業後には一路45°N以南位を東進170°Wより135°W間にて捕獲、抹香漁と言えどもヒゲに劣らず走り廻らねばならなくなった。

昭和44年第18次は再び3社3船団ヒゲ抹香と操業形態が別れた。前回の3社3船団11~13北の時は前期抹香中期ヒゲ後期抹香と分けていたが、此の年にはいるとヒゲ資源も悪くなり各船団とも主力をヒゲに注ぎ、終ってから抹香の残りを捕獲すると言う形になった。このため各社狙うところが同じため競合の機会が多くなって来た。3日新はアラスカ湾及前年図南の開拓した45°N以南150~130°W間を主として操業、図南はこの附近よりアラスカ湾東部の2000尋線沿いに北上、2極洋はヒゲ中既に半数近く(490)捕獲していたので一路列島北側を西進コマンドルスキーからブルディアの間を一往復して捕獲完了、この附近にも可成り鯨が集っている事が確認された。

今年の第19次北鯨は昨年と同じ操業形態で出漁したが、抹香は各船団100頭減の900計2700となった。3日新はヒゲが47°N140°W附近で終了したのでヒゲ中ボツボツ抹香の発見があったカナダ沿岸を北上したものの期待に反して発見が少ないため南下し45°N以南を西進したが140°W以西は特に大抹香が多く160°W附近で終了した。この附近は16北における抹香捕獲の南側に当る。図南はウニマク北側でヒゲを終了したので真直南下16、17北の実績及びその南側160°W~170°Wを反覆した。2極洋は前年同様ヒゲ抹香を並行して捕獲、6月19日以降は専ら東経で操業、ヒゲの合い間を見て列島沿いに3度往復コマンドルスキー、アムチトカ間を操業したがヒゲが終了した時抹香は130頭位しか残っていなかったためあと西向きで終了した。今年の操業で北太平洋の許可区域内は殆んど操業し尽した感じがする。今年の特異な現象は大抹香が非常に多かったことで平均体長3日新13.3米、2極洋13.4米、図南14.6米、平均13.8米(45.3フィート)と今迄14北の平均46.1以降15北43.8、16北43.5、17北42.9、18北42.0と低下し続けた平均体長が一挙に跳上った。今年は沿岸の抹香も大きく又もれ承る処によるとニュージーランドの抹香も大きいとの事でこの様に全面的に亘って抹香の大型化は特殊現象であろうと思うがどの様に解釈すべきであろうか。

(質疑応答)

- (宇田) ソビエトは日本より捕獲数が多いのは何によるのか?
- (古川) 捕鯨船が多く船団規模が大きいことおよび漁期がほぼ周年にわたっていることによる。
- (宇田) 今年マッコウが大型化したというのはどういうことか?
- (古川) ソビエトは判らないが、日本側資料では母船式、沿岸共に大きかった。第5次北鯨(昭和31年)とよく似ている。漁場や海況は例年と大差なく、群が異るとは思われない。
- (正木) 4~5次ではアリューシャン列島の北側で体長が大きかったが、小型マッコウもいたのか?